潮風の女

潮風の女

岡田光治著

KK東洋出版刊

岡田光治（おかだこうじ）

昭和８年生。

■昭和30年度シナリオ作家協会コンクールに「情婦」入選。昭和32年度シナリオ作家協会コンクールに「小さな帝国の記録」入選。昭和40年度芸術祭文部大臣奨励賞をテレビドラマ「岐路」により受賞。

■最近の主な作品

「文五捕物絵図」「開化探偵帳」（ＮＨＫ）数人のグループによる執筆。「立ち入り禁止・恋と恋」（ＮＴＶ）。「七人の刑事」「あ、夫婦」「マイホーム'70」（ＴＢＳ）。「釜めし夫婦」（フジＴＶ）。「めぐり逢い」「あす咲く花」（ＮＥＴ）。「お多江さん」（大阪朝日放送）。その他多数。

¥380

潮風の女

昭和45年５月30日初版発行

著者　岡田　光治

発行者　千葉　勝也

発行所　株式会社　東洋出版

東京都新宿区百人町２－68
ＴＥＬ　200－2485

© 1970

（分）93（製）0005（出）5303

製版　㈱プリント・サービス

寅さん（北村和夫・左）はアイ（朝丘雪路・右）と清次の間に出来た子をわが子のように可愛がった。

上・アイ（朝丘雪路）と寅さん（北村和夫）。
左・アイは良太郎の学童疎開先を訪ね、旅館で久振りに二人で食事をとることができた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

墨田電話局の焼跡で主事から今後の指示を受ける交換手たち。

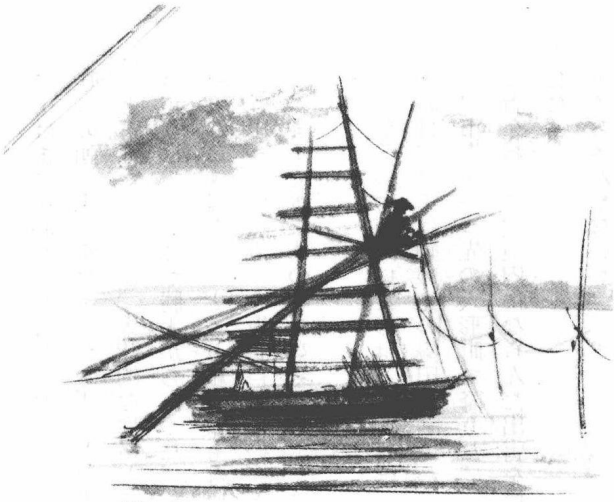
昭和20年，東京大空襲で墨田局は全焼した。最後まで職場を守った32名の交換手中，生き残ったのはたったの4人だけだった。生き残りの1人である大三川久子さん（右から2人目）ら元局員がスタジオを訪れた。

目次

第一章……5
第二章……37
第三章……57
第四章……85
第五章……115
第六章……157
第七章……187
第八章……219
あとがき……232

装幀・水木連

潮風の女



ボラ待ち網

第一章

1

能登島通いの船が出ていったあと、桟橋の待合所には、五、六人の客が残った。商家の旦那らしい男や行商人、それに赤ん坊を背負った若い母親など、みんな次に出る中居行の汽船を待っているのだ。

だが、さいわいなことに、その中にアイの知った顔は一人もいなかった。

アイは立ちあがって、待合所を出た。パチッと小気味よい音をたててひらいたパラソルに、待合所の視線が一斉に集まった。

アイはぶらぶらと桟橋の突端へ向かって歩いていった。パラソルの影をこぼれて、石畳にはねかえる陽ざしは、まだ夏の盛りを思わせたが、振り仰ぐ空の色には、すでに秋の気配が漂っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アイはまだ決心がつかなかった。
昨日の朝、東京を発ってからずっと、夜汽車の中でもそのことを思いつめて一睡もできなかった。どちらかといえば、大陸的な性格とでもいうのか、何事にも屈託のないアイなのだが、こんどばかりは、いささか勝手がちがった。
〈そんなはずはない、どうせ根も葉もない噂にちがいない〉
そう思って何度もくり返し自分にいいきかせ、気をとり直そうとしたが、一度吹き込まれた不安は、まるで水平器の中の空気玉のように、アイの胸中を右に左に揺れ動いて消えなかった。

アイがその噂を聞いたのは、一ト月ほど前のことである。
その日、アイは勤め先の墨田電話局から宿明けで帰る途中、水天宮の縁日であったのを思い出して、市電を一つ先の人形町で降りた。
参詣をおえて、境内にならんだ出店を見て歩いていると、いきなり思いがけない男に呼びとめられた。
「アイちゃんやないか」
それは能登にいるころよくアイの家に出入りしていて顔見知りの富山の薬売りで、喜三郎という男であった。
「東京におるらしいということは聞いとったけど、まさかこんなとこで会うとはなア」

境内の葭簀で囲った茶店で氷水を食べながら、喜三郎はあれこれとアイの近況を聞きたがった。アイが現在どんな男と暮しているのか、そのことがなによりも知りたいらしく、

「アイちゃんほどの器量やったら、東京の男が放っておくはずがない」

絶対に男がいるにちがいない、親父さんたちには何も喋らないから、白状しろとしつっこくせめたてた。

「わてが、そんな女やと思うとるが?」

と、思わずけわしい口調になったが、アイは相手が相手だけにそれ以上怒る気にはなれなかった。そんな目で見られている自分を、半ば無理もないとも思った。

以前からアイには、その持前の明るく屈託のない性格を、奔放で無軌道な娘のように誤解されることがしばしばあった。

大柄で色白のアイは、どことなく男好きのする顔立ちでもあったし、それでなくても若い娘が勝手に親許を飛び出し、都会でひとり暮していれば、他人から興味本位の想像をたくましくされても仕方がない。だからそんなことは一向気にはしないのだが、何気なく喜三郎が口にした次の言葉には、一瞬、体内の血が逆流するのを覚えた。

「そういえばケイちゃんも、いよいよ雁月の清次さんと一緒になるがに決まったらしいな」

「雁月」というのは、穴水に古くからある造り酒屋で、清次はその蔵で働く酒職人の一人であった。ケイは、アイの三つちがいの姉である。

〈清次さんが、姉ちゃんと結婚する?!〉

アイにとって、これ以上の衝撃はなかった。

清次とは表立って結婚の約束こそとりかわしたわけではなかったが、共に将来を誓い合った仲であった。そんな二人の暗黙の関係は、今もつづいていると、アイは信じていた。

三年前、東京行を思いとどまらせようとする清次の懇願を振り切って、強引に故郷を飛び出してしまったことを考えれば、そんな安心はいかにも一方的で、虫のいいようにもとれるが、同時に、それは今も鮮烈なまでに清次の熱い息づかいを肌身に刻みつけて記憶するアイのみが持てる確信でもあった。

しかも、その結婚の相手は、実の姉のケイだという。

〈姉ちゃんだって、わてと清次さんのことは、ちゃんと知っているはずや〉

そう自分に云いきかせながら、アイの心はやはり乱れた。

交換台に向かっているときも、眼の前の通話申込みを報らせるランプが、いくつもついているのを知らず、ぼんやりしていては何度も見廻りの監督に注意される始末であった。そんなことは今まで一度もなかったアイである。

そんなアイの不安と焦躁をいっそうつのらせたのは、ある夜眠れぬままにペンをとって、清次宛に書いた手紙の返事が、いつまで待っても来ないことであった。

突然、退職を願い出たアイに、電話局の上司も同僚もおどろいて引きとめたが、すでにアイの

浮足立った心は、毎日の単調な交換台の作業に耐えられる状態ではなかった。

聞きおぼえのある汽笛の音に、アイは我にかえった。左手の海上へ眼をやると、ちょうど大杉崎の鼻をまわってくる七浦丸の姿が見えた。やがて古ぼけた船体が桟橋に横づけになり、十人足らずの乗客が降りて来た。

アイは待合所の中で通路に背を向け、全部の乗客が通りすぎてしまうのを待った。どうせ、あと二時間もすれば、いやでも知った連中と顔を合わさなければならないのだが、今はまだ誰にも顔を見られたくない気持だった。そのくせ、誰でもいい早く確かなことを知る人間に会って、姉と清次のことを聞きただしたい衝動もあった。わざわざ海路を選んだのもそのためである。

七浦丸の船長須摩大造は、アイの父親の太郎次とは小学校の頃からの喧嘩友達で、その女房のトキも、七年前に母親をなくしたアイたち姉妹には、なにかにつけてよき相談相手であった。大造ならなんでもアイの家のことは知っているはずである。

油まみれになって機関の点検をしている大造の姿を見つけると、アイはゆっくりと船首の方へ近づいていった。背後に立った人の気配に、中腰のまま顔をねじあげた大造へ、アイは持前の人なつっこさでニッコリと笑いかけた。

「ほう……」

と、いったまましばらくアイの顔と流行の真新しいパラソルを見くらべていた大造が、

「なんでわしの船になんか乗ったがいや」
と、急に怒ったようにいった。
「穴水まで鉄道が行くようになったがを知らんがか」
「知っとるわ、七尾の停車場で向こう側のプラットホームに、穴水行って書いた汽車が停っとったもん」
「ほんなら、なんでそっちに乗らなかったんや」
「どっちに乗ろうと、わての勝手でしょ」
「そりゃまあそうやが……」
大造はいいまけて少し機嫌が直った。
「どうせ鉄道にお客とられて、おじさんが困っとるやろ思ったから、わて一人でも乗ってあげたら助かるやろ思ってね」
それからたっぷり一時間以上、大造はアイを相手に、口を極めて鉄道とそれを利用する誰彼を罵倒し、呪いまくった。アイは時々笑いを噛み殺しながら聞いていたが、おかげで姉と清次のことは、何一つ聞き出すことができなかった。
大造が意識的に話題をそらしたのか、そんな器用なことのできる人間ではないし、また、そんな風にも見えなかったが、アイはそれでかえって救われた思いであった。
もしも、姉と清次のことが事実だったら、それを聞かされたとき、その瞬間に自分がどういう

顔をすればいいのか、アイにはまだその心構えができていなかった。

船はいつのまにか三ケ口の瀬戸を抜けて、波おだやかな七尾湾北湾を、まっすぐ穴水の町はずれにある鵜島の桟橋に向かってすすんでいた。その頃になってようやく大造も、喋り疲れたのか、アイのそばを離れて、操舵室へ入っていった。

アイは甲板に立って、久しぶりに眺める故郷の入江の美しさに見惚れていた。アイは海上から見る穴水の景色が好きであった。七浦七入と呼ばれるこのあたりの海岸線は、その長汀曲浦すこぶる変化に富んでいて、能登半島の中でも特に女性的なやさしさをたたえた佳景であった。

その昔、西行法師が、

立ちかえり、辺津の入江に船とめて
いくたびも見む、能登の島山

と、感懐したのもこのあたりである。

それから小一時間ほど経って、中居へ向かう海沿いの道を、アイはひとりで歩いていた。あのまま船に乗っていれば、もうとっくに家についている頃である。鵜島を出れば中居まで二十分で着く。アイの家は、そこの桟橋から歩いてほんの一、二分のところにあった。

大造には、「郵便局に用があるから」といって降りたのだが、もちろんそれは口実で、本当は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com